The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソンにおける物質の本性と二元論
Author(s)	陀安, 広二
Citation	メタフュシカ. 1999, 30, p. 71-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66619
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルクソンにおける物質の本性と二元論

陀安広二

序

ベルクソンは彼自身の立場が二元論であると認め、『物質と記憶』の第七版の序文の冒頭ではこう述べている。「本書は精神の実在性と物質の実在性を肯定し、その相互の関係を明確な実例、記憶力の実例において決定しようとする」(161)。ただ、ベルクソンによれば、従来の二元論は多大な理論的困難をはらんできた。世界が本性上異なる二つの原理によって構成されているとすれば、世界にこの二つの原理が共存している以上、二つの原理がどのように結合し、一体となってこの世界を構成しているかが説明されなければならない。そのとき、ともすれば、一方では精神の側に偏った観念論的立場が生起し、他方では物質の側に寄り添った唯物論的立場が形成される。ベルクソンはこうした傾向がその物質規定に関わっていることを指摘する。「これら諸困難は、その大部分が、物質について作られる一方では実在論的な概念、他方では観念論的な概念に起因する」(*ibid.*)。だとすれば、ベルクソンの探求の最終目的が物質の本性を明らかにすることではなく、むしろ精神の実在を論証することであるにしても、そのための方法論として、物質とは何であるか、あるいは少なくとも何であり得ないかについての探求が不可欠となると考えられる。本論では、こうした観点から、ベルクソンの物質概念を『物質と記憶』から『創造的進化』にかけて検証し、彼の二元論がどのようにして従来の二元論の困難を乗り越えるのかを明示したい。

一　『物質と記憶』へ至る物質概念

ベルクソンが物質の本性をどのように考えていたかを知るために、彼が批判の対象としている物質概念を概観してみよう。

一つは観念論的な物質概念とされるが、それは物質を精神の産物、つまり単なる〈表象〉として捉える立場である。物質は精神のなかにおいてのみ、それとの関係においてのみ存在し得る。そこでは精神に対する物質の存在の独立性は認められない。もう一つは唯物論的、ないし実在論的な物質概念であり、物質は私たちの意識に現れるその感覚的諸様相とは無縁の〈事物chose〉として見られる。このとき精神に対する物質の存在の独立性は確保されるものの、物質は私たちにとって不可知の自体的存在と見なされる。ところが、この二様の物質概念、〈表象〉と〈事物〉はともに、ベルクソンの考えでは、精神と物質の二元論を理論的困難に導くことになる。物質を単なる〈表象〉ととれば、精神と物質の関係が説明され得る一方で、両者の独立性は事実上失われる。また、物質を即自的〈事物〉ととれば、精神と物質の相互の独立性は維持されるものの、物質の本性は精神にとって知られ得ない以上、両者の関係は理解不可能なものにとどまる。どちらの概念をとるかにしたがって、一方では物質の精神に対する独立性が、他方では物質の精神に対する関係が説明不可能になると考えられるのである。

実際、この独立性と結合関係は、物質の本性を規定する際に、しばしば両立困難なものとして現れる。たとえば、バークリーは「物体があるのではなく物体の観念があるのだ」と主張する。物体とは私の持つその観念にほかならない。すると、その論理的帰結として、私の持つこの観念が他の人間の持つ観念と共通であるということは決して主張し得ないであろう。しかしながら、バークリーは一方で、神が私たちのうちに同一の宇宙を表象するよう観念を刻印したとして、〈観念の共通性〉を理論付けようとする。このときバークリーは、〈私の観念〉の理論のみによっては到達不可能な〈観念の共通性〉へと、〈私の観念〉の理論の外部にある神を仲介にして危険な跳躍を試みているのであるが、ベルクソンはその理論的展開を観念論としては不当なものと考えている。「実のところ、そのすべてが同一の宇宙を表象する複数の意識的存在、多様な知性的存在を措定するときに、観念論はすでに一貫性を欠いているのである」[1]。すなわち、観念論は物質を物質の観念に還元し、〈私の観念〉の外にいかなる外的存在をも立てないことを本領とするにもかかわらず、その一方で何らかの外部性の侵入を許し、観念論という自らの立場を危うくしているのである。

さらに言えば、〈私の観念〉にとどまるときですら、観念論は何らかの外部性の侵入を許さざるを得ない。私の持つ観念のなかには、まったく予見不可能な仕方で継起するものと、その一方で一定の秩序に基づいて継起するものとがあると思われる。前者は全く主観的な観念であると言えるだろうが、しかし後者の観念の秩序は私からは或る意味で独立したものと考えることができると思われる。そこで、カントは、この表象の秩序

を、それはもの自体に対して精神が割り当てる形式やカテゴリーであるとして、精神の側から説明を試みる。表象の継起の秩序は精神の外部にその根拠を持つのではなく、現象を可能にすべく主観の側からもの自体に適用される主観的秩序に他ならないとされる。しかし、それに対してベルクソンは「この形式やカテゴリーがどのようにして直観の質料に適用可能なのだろうか」[2]と問うている。すなわち、表象の秩序の起源を主観の側に移すと同時に、その秩序が割り当てられる素材として主観とは区別される何らかの存在が仮定されることになるのであり、この存在が主観とは区別されればされるほど主観との接合が困難になると思われるのである。

このように、観念論は、物質の精神に対する独立性を拒否しながら、その一方で自ら何らかの独立的存在を容認するに至り、また、観念論の徹底によってむしろ逆に主観とは区別される実在を仮定することになる。そして、そのようにしてひとたび実在論に身を置けば、今度は物質と精神の接合を理解することが困難になるのである。したがって、ベルクソンは、物質が精神から独立した実在であるとしても、それと同時に物質は精神との接合が可能な実在でなければならないと考える。「実在論とは、我々の知覚がこの知覚の原因である我々から独立した実在に相応するものであるということ、この実在はおそらく知覚に類似してはいないだろうが我々の知覚のなかにある本質的でとりわけ知解可能なものをそれ自身のうちに含んでいるということを肯定することに存する」[3]。ベルクソンにとって、物質の実在とはこのように理解されなければならないのである。物質についてのこの考え方は『物質と記憶』のイマージュ論に色濃く反映されている。

二　『物質と記憶』における物質概念—イマージュの総体

イマージュとは何か？それにはさして難解な哲学的概念が含まれているわけではない。ベルクソンはイマージュとは常識の理解する意味における知覚対象のことだと言う。私たちは、一定の輪郭を持ち、色彩に満ち、触れば一定の抵抗を有する対象を知覚する。常識の理解によれば、この対象は私たちの知覚作用によって創造された観念などであるはずもない。対象は私たちが知覚しなくとも現に存在し得るし、知覚される対象が広大な物質世界から私たちの知覚作用がたまたま切り取ってきた断片にすぎないことを私たちはよく知っている。また、同じく常識の理解にとって、いま私たちが知覚しているこの対象が実は本当の物質の姿ではなく、対象の背後に知覚への現れを可能にしている不可知の世界が広がっているなどということは想像にも及ばない。私たちに与えられる感覚的諸性質は対象に本来的

に備わった様相なのであって、この感覚的様相を剥奪された状態で存在し得る何ものかが対象を背後から可能にしているとはいささかも思われない。イマージュとはそうした知覚された対象のことであり、こうした常識の範囲内で理解可能な概念なのである。「常識にとって、対象はそれ自身で存在し、かつ一方で、対象はそれ自身私たちが知覚するがままに色彩豊かなものである。それはイマージュであるが、それ自体において存在するイマージュである」(162)。イマージュとは、いわば観念論的〈表象〉と実在論的〈事物〉との中間において捉えられた対象のことなのである。

そこでベルクソンは物質を「イマージュの総体」と規定する。では、物質とは知覚されたイマージュを取り集めたその全体のことなのだろうか?言い換えれば、私たちの知覚作用によって断片化され、矮小化された部分的イマージュを相互に結び付け、再構成するその終局において得られるであろう全体なのだろうか?しかし、一見して分かるように、もしそうなら、全体は事実上得られ得ないであろうから、物質は私たちには事実上知られ得ないであろう。なぜなら、私たちには常に断片化されたイマージュしか与えられないし、私たちはその有限な諸断片でもってイマージュの全体を語る権利を持ち得ないであろうから。

物質と物質の知覚との関係をベルクソンはこう説明する。「イマージュは知覚されなくとも存在し得る。それは表象されなくとも現存し得る。現存と表象という二つの語の距離は、物質そのものと我々がそれについて持つ意識的知覚との隔たりに正確に相応する」(185)。したがって誤解してはならない。意識的知覚に与えられる断片的イマージュを取り集めたその先に物質が存在するのではない。物質は表象されなくとも現存し得るのであり、いわば観念論的に、すでに表象になったイマージュから出発して得られる全体の形象ではないのである。ベルクソンにおいては順序が逆で、まず物質的世界があって、そこから知覚が切り出されてくるのである。したがって、「イマージュの総体」とは個々のイマージュから再構成される全体のことではなく、個々のイマージュへの断片化が発出する母体のようなものなのである。

だが、そうだとしても、私たちが手にしているのが断片的イマージュでしかないことには変わりがない。この断片的イマージュによって再構成するのではないにせよ、私たちはやはりこの断片的イマージュを手がかりにして物質の本性を捉えるしかない。そしてもし知覚過程を通じて断片化されたイマージュが物質の本性を何らとどめていないとすれば、私たちは物質について何も知ることはできないだろう。しかしベルクソンの考えでは、そうした事態が起こり得るのは、知覚過程を物質に何ものかが付加される過程と見なす場合に限られる。たとえば物質を知覚することが物質に何らかの主観的形式を割り当てること

だとするなら、物質はこの形式によってはじめて私たちに見えるものになるのであるから、形式の付与される以前の物質の姿は私たちにとって不可知なものであるだろう。しかしながら、ベルクソンの言うように、知覚過程が或る種の「減少行程voie de diminution」(*ibid.*)であるとするなら事態は一変する。物質は知覚過程を通じてその何ものかを失いはするものの、その残りの何ものかを知覚されたイマージュのうちにやはり保持しているとするならば、この断片化されたイマージュから出発して私たちは物質の本性を捉えることができるのではないだろうか？知覚に与えられるイマージュとは、「イマージュの総体」としての連続体から何ものかが差し引かれたその残余、イマージュの「外殻」や「外皮」に他ならない。「イマージュの総体」に比べて本質的に貧困であることは否めないけれども、知覚過程を通じて根本的な変質を蒙ったわけではなく、知覚の捉えるイマージュはそれでもやはり物質の何ものかを保持している。

逆に言えば、知覚による把捉を免れている物質においても、「表象はたしかにそこにあるのだが、他のものに連続し他のもののなかに消失してしまわなければならないので、現実的になろうとするそのときには、常に潜在的になり中和されてしまう」(186)。したがって、物質とは、非現実的知覚、潜在的知覚、あるいはまた潜在的意識と言うことができよう。物質がこのように意識を全く欠いた即自存在ではないならば、どのようにして意識が生じるのかという問いはもはや意味を持たないだろう。「意識を演繹することは甚だ大胆すぎる試みであって、ここではそれは全く必要ではない。なぜなら、物質世界を措定することによってイマージュの総体が与えられたのであって、さらにまたそれ以外が与えられるのは不可能だから」(185)。したがって、問うべき問題は、知覚ないし意識がどのようにして現実化し、限定されるかということになる。「あなたが説明すべきは、どのようにして知覚が生じるかではなく、どのようにして知覚が限定されるかである。なぜなら、知覚は権利上では全体のイマージュであるのに、事実上、あなたの関心を引くものに縮減されているのであるから」(190)。

潜在的意識から現実的意識への移行を可能にするのが身体である。

実を言えば、物質概念の変更は知覚概念の変更を抜きにしてはあり得ない。ベルクソンによれば、二元論が、一方では観念論的に、他方では実在論に傾くのは、「知覚は全く思弁的な関心を持つ。知覚とは純粋認識である」(179)という先入見があるからである。科学による物質の理解に比較すれば、私たちの知覚に与えられる物質の様相はいかにも流動的で不分明なものに思われる。その点に着眼する実在論的二元論は、知覚作用を科学に対して劣った知、「混乱し、仮説的な科学」と見なすだろう。その結果、知覚の外部に存在すると見なされる物質の本

性は、それに対して科学が接近可能であるかどうかを問わず、私たちの知覚には決して現れ得ない「事物」となる。また、反対に、知覚経験に現れるがままの物質の様相を真の物質の姿だととれば、科学の対象とする物質の様相、つまり一定の自然法則に従い作用反作用を繰り返す物質の様相は、単なる「実在の記号的表現」であるということになろう。このような観念論的立場にとって、物質は精神の構成物にすぎず、精神の外部にそれとは独立した存在を保持することはない。科学が対象とする物質は、知覚の捉える物質の実在的様相の抽象にすぎないというわけである。すなわち、知覚が思弁的認識に属する働きであるとするなら、知覚は常に科学的認識との相関関係において評価されることになる。そして、或る場合には科学的認識に対するその劣等性が指摘され、他の場合にはその優越性が考慮されることになる。前者の場合、実在論的な物質概念がそれに付随して生起し、後者の場合には観念論的な物質概念が登場することになるのである。

これに対して、ベルクソンは知覚を行動の領域において考えようとする。「私はイマージュの総体を物質と呼び、或る特定のイマージュ、私の身体に関係づけられたこの同じイマージュを物質の知覚と呼ぶ」(173)。知覚とは、周囲の事物に対する身体の行動の可能性、「可能的行動」を表すに他ならない。物質世界のなかで身体の要求に応ずるイマージュが知覚として浮き上がってくるのである。知覚過程には観念の創出や意識への変換作用などは含まれないのであって、身体と無関係なイマージュが背後に退き、それによって身体と利害関係を持つイマージュが自然に表面に浮き出てくる一連の「弁別 *discernement*」(194) 過程が知覚と呼ばれるのである。[4]

以上が「イマージュの総体」としての物質規定である。潜在的知覚として存在する物質は、「減少行程」である知覚過程を通じてその何ものかを失うが、知覚に与えられるイマージュは身体の「弁別」する働きによって単に切り取られてきたものにすぎないので、そこにはやはり物質の何ものかが与えられている。

三　イマージュの総体はどのようにして知られるか

知覚に与えられるイマージュのうちに物質の何ものかが与えられていることはたしかである。しかし、断片化されたイマージュを知ることと「イマージュの総体」を知ることは別のことであろう。もちろん、物質世界の全体を一挙に知覚するのは事実上不可能であろう。しかし、「イマージュの総体」の方に向かって、現に知覚に与えられているイマージュ以上のイマージュ、あるいはさらに、イマージュという現れの根源を垣間みることは可能なのではないか？もしそれが可能なら、私たちは物

質の存在をより明確に捉えることになろう。

（一）無意識

私たちはいま知覚されている事物の先に、たとえそれがいま知覚されていないとしても、他の事物が存在していることを知っている。このことは知覚にとって本質的なことである。「…我々の知覚に与えられる直接的地平は、存在するが知覚されないより大きな地平枠によって必然的に取り囲まれていて、この地平枠はそれを取り巻く別の枠をそれ自身伴っており、これは無限に続くように我々には思われる。それを包みこむ、より広い、そして無限でさえもある経験に対して常に部分的内容でしかないことは、延長としての我々の現在の知覚の本質に属する」(286)。すなわち、イマージュは「表象されなくとも現存し得る」と別のところで述べられていたように、私たちが見ることができない扉の向こう側にあるイマージュは、知覚されていないだけであって、たしかに存在しているのである。そうしたイマージュは、経験の外部で私たちの精神によって構成されているのではない。「この経験は、知覚された地平を越えているがゆえに我々の意識には不在であるが、それでもやはり現実に与えられているように思われる」(*ibid.*)。意識には不在であるが現実に与えられるこの経験は、「無意識的なもの l'inconscient」(287) の経験であると考えられる。

ベルクソンは無意識について訊ねられた際、「物質全体の無意識的知覚」が存在し得ることを、断定はしないにせよ、少なくとも示唆している。[5] ところで、彼の理解する無意識とは次のようなものである。「或る全体的な心理状態がそれとともに或る暗さの感情sentiment d'une obscurité、或る欠如の漠然とした知覚 vague perception d'une lacune を伴っており、しかも、いかなる新奇なものもこの状態それ自身に外的なものもそれに付加されることなく、この欠如が満たされこの暗さが一掃され得るという確信を伴っていると想定してみよう。そのときそこに明確には現れないにせよ、この状態のうちには何ものかが存在する。それは純粋な無ではない。なぜなら、もしそれが何のものでもないのであれば、心理状態は自足しているであろうし、いかなる不安も伴わないだろうから。にもかかわらず、それは意識的なものには属さないだろう」。[6] 心理状態に伴う「暗さの感情」、「欠如の漠然とした知覚」、「不安」は、意識には現れない。しかし、それらはその心理状態を漠然とした形で取り巻き、むしろ心理状態そのものに内在する。「この無意識的なものは、現実の意識的心理状態の或る欠如に存するが、それは積極的な性質を持つ欠如であって、単なる空虚とは全く異なる」。[7] 物質全体の知覚が或る種の無意識だとするなら、それはこの〈積極的な欠如〉とともに捉えられ得るとは考えられないだろうか？

実際、私たちの知覚は自足してはいない。知覚に現れるイマ

ージュは身体の「行動の要求exigences de l'action」にしたがって浮き上がってくるが、「行動の要求」が不断に働くものである以上、知覚において意識が把捉するイマージュそのものもその都度不断に更新されなければならない。意識は、常に、現に与えられているイマージュのその先を視野に入れようと前のめりに傾きつつあるのであり、この意識の態度が〈積極的な欠如〉として経験に与えられることになると思われる。つまり、身体は、その「行動の要求」によって、「イマージュの総体」から特定のイマージュを限定しつつイマージュの貧困化を引き起こす一方で、それと同時に、その同じ「行動の要求」によって、「イマージュの全体」を把握する可能性をそれ自身のうちに含んでいると言うことができる。逆説的ではあるが、知覚はその本質的な完結不可能性において、逆に物質全体の知覚へと開かれていると考えられるのである。

(二) 純粋知覚

ベルクソンはあらゆる記憶力、つまり知覚に紛れ込んだ主観的なものを取り除いた知覚を純粋知覚と呼び、この知覚において物質の「直接的であると同時に瞬間的な視像」(185) が得られるとしている。純粋知覚は私たちの現実の具体的な知覚とは異なるが、そうした経験上の知覚の成立条件を成す知覚であり、決して空想上のものではない。物質の精神に対する独立性、物質の客観性が私たちの具体的知覚に与えられる極限の場、その条件として純粋知覚は考えられているのである。知覚の主観的側面は、純粋知覚において与えられる物質のそれぞれの瞬間的視像を記憶力によって一定の持続のうちに収縮させて捉えることに起因する。知覚に現れる感覚的性質はこの記憶力の収縮作用に由来する。この記憶力を解除すれば、それまで持続のなかに凝集していた諸瞬間が一斉に解き放たれ、相互外在的な無数の瞬間が純粋知覚において捉えられることになるのである。この純粋知覚において、対象は私たちに物質的側面をよりはっきりと明らかにすると思われる。

しかし、また、この純粋知覚といえども、まさに物質と精神との連結点に位置するがゆえに、記憶力の働きを完全に払拭することはできない (cf.354)。「我々の純粋知覚は、どんなに素早いものと考えるとしても、或る持続の厚みを占める」(216) のである。純粋記憶において捉えられる物質の「直接的であると同時に瞬間的な視像」は、実はすでに記憶力の働きによって影響を受けていて、それは「事物の現実の諸瞬間」にではなくすでに「我々の意識の諸瞬間」に合致するのである (*ibid.*)。とはいえ、それは精神によって構成された瞬間ではない。「我々の延長的感覚がより数多くの瞬間に分割されるのに応じて、物質は次第に等質的になり、実在論の語る等質的振動の体系に際限なく近づくだろうが、にもかかわらずそれと完全に合致する

ことがないのは確かである」(217)。記憶力の解除によって物質があらゆる記憶力を排除した純粋な瞬間に行き着くとすれば、それはむしろかえって実在論の考える即自的瞬間であって、精神の観念的構築物にすぎない。そうではなくて、知覚のあらゆる主観的な性質を除去すべく記憶力の収縮作用を徹底的に解除していった結果、それにもかかわらず意識を刻印された瞬間がなお残存するとすれば、まさにこの意識の瞬間においてこそ物質と精神は結び付いていると言えるのではないか?意識の瞬間の取り除きがたさとは、物質と精神の結合の事実性を示していると考えられるのである。

純粋知覚という意識の瞬間において捉えられる物質の実在性はどのようなものか?「知覚から物質へ、主体から客体へ移行するためには、この時間の不可分な厚みを理念的にidéalement分割し、この厚みにおいて必要なだけの多数の瞬間を区別すれば十分であろう」(*ibid.*強調は筆者による)。物質が多数の瞬間に還元されるとしても、この瞬間そのものが現実の経験に与えられ得るというわけではないだろう。純粋知覚は私たちの経験そのものにおいて与えられるのではなく、経験の条件としてその存在が主張され得るのであるから。したがって、純粋知覚において捉えられる物質の実在性とは、経験に与えられる実在性ではなく、あらゆる記憶力の解除という思考実験の終局において与えられ得る実在性であって、いわば理念的実在性であると考えられるのである。しかし、だからと言って、この実在性が精神による観念的な構築物であるというのではない。物質と精神は、純粋知覚において、そこにおいてのみ結合を見出され得るのであるから。

(三) イマージュの知覚からイマージュの総体の把握へ

私たちの具体的知覚には、身体の欲求にしたがって、様々の輪郭や形象で区切られたイマージュが与えられる。しかし、「物質の理論は、有用で、我々に欲求に全く相関的なイマージュの下に実在を再び見出すことを任務とするのであるから、それがまず捨て去らなければならないのはこれらイマージュである」(336)。分割可能性は物質に本来備わった特性ではなく、「我々が物質に働きかける図式」(345)である等質空間の表象に由来する。私たちは、等質空間を物質の下に張り巡らし、等質空間の持つ無限な分割可能性を手がかりにして物質を任意の物体に裁断する。ゆえに、イマージュには物質の何ものかが与えられているといっても、このようにイマージュの分割可能性は物質から手に入れたものではないので、物質の本性を知るためにはむしろこの分割可能性を除去しなければならない。では、知覚に与えられるイマージュの示す特性のうち、私たちが物質から直接手に入れたものは何か?それは延長という特性である。イマージュから分割可能性を排除したからといって、それ

は直ちに延長を失うわけではない。「人は、或る程度において、延長を離れることなく、空間から身を引き離すことができる。まさにそこに直接的なものへの帰還がある。なぜなら、私たちは、図式を通じて空間を把握したと見なすしかないのに対して、延長の方は実際に知覚するのであるから」(323)。物質とは分割されざる延長なのである。

ところで、知覚は、物質を分割して把握すると同時に、物質を不動のイマージュとして把握する。「知覚するとは不動化することを意味する」(342)。イマージュを知覚するということは、なるほど、身体のその都度の欲求に合わせてイマージュを固定した状態で断続的に切り取ることであろう。したがって、物質から分割可能性を取り去るということは、物質から不動性を取り去ることに等しい。不動性を取り去れば、物質は「変動する連続性 *continuité mouvante*」(333) となるだろう。また、絶えず変化しつつある「感覚質の連続性」(334) であるだろう。物質は、このように、絶えず変化しつつある不可分の延長なのである。

したがって、物質が「イマージュの総体」と規定されるとしても、その意味は、イマージュを寄せ集めてできる全体の形象が物質だということではなく、物質とは、互いにはっきりと区別される個別的イマージュへと形作られるその手前にある、全体として見られた流動する延長だということなのである。「イマージュの総体」はイマージュの現れの一条件を成すが、逆にイマージュはその集結によって「イマージュの総体」を作り出すわけではない。ベルクソンの言うように両者が全体と部分の関係にあるとしても、それは空間的な次元において理解されてはならないのである。

物質をこのように流動する不可分の延長として捉えるためには、知覚の本性を捉える際とはむしろ逆に、行動の領域から「純粋認識の領域」(*ibid.*) へ身を移さなければならない。物質はイマージュとして知覚されるが、物質の本性は流動する延長として把握されなければならないのである。

四　『創造的進化』における物質概念

『創造的進化』では、『物質と記憶』の結論を継承しつつ、物質概念のさらなる深化が見られる。すでに述べたように、純粋知覚において解き放たれる多数の瞬間は実在論が考えるような純粋な数学的瞬間ではない。それらは、意識の最短の持続に対応するものとして、すでに一定の持続を占めている。この持続をさらに解体することは不可能であり、物質が規定されるのはこのかすかな持続を持った瞬間においてである。「極限において、我々は、絶えず再開する現在で作られる存在を垣間みる。もはや実在的な持続もなく、無限に死んでは生き返る瞬間性し

かない。そこに物質の存在があるのだろうか?:完全にそうであるわけではない。分析は物質を要素的な振動に解体し、その最も短いものは非常にわずかでほとんど消失しそうな持続を持つであろうが、持続がないわけではないから」(665)。持続を徐々に緩やかなものにしてみれば、それまであらゆる記憶が一体となって集中し緊張状態を保っていた自我は解体し、相互に明確に区別される記憶の諸形象が現れる。さらに緊張を解きほぐしてみると、今度は拡がりを持った感覚が生じる。物質はこうした空間化の運動をさらに延長したものなのである。

ベルクソンは空間性をこう定義する。「完全な空間性とは部分相互の完全な外在性に存し、つまり部分相互の完全な独立に存する」(667)。ところが、物質が無限に短い要素的な振動に解体されるとしても、その振動の各々は微小な持続を持っており、その部分相互は、弱い形であれ、やはり連帯していると考えられるだろう。また、はっきりとした輪郭を持ち、相互に独立した系を成すと思われる対象も、子細に見れば相互に影響関係を保っているということ、物質のはっきりした輪郭は物質の本性には属さないということを私たちはすでに確認している。よって、物質は完全な空間性として規定されるのではない。「こう言うほかはない。物質は空間のうちに拡がっているけれども完全に拡がりきっているのでない。物質を孤立した系に分解可能であると見なし、相互関係において変化するがそれ自身は変化しないはっきりと区別される諸要素が物質にあると考え、最終的に純粋な空間という特性を物質に付与することによって、人は、物質が単にその運動の方向を描くにすぎない運動の終端に身を置いているのである」(668)。純粋で完全な空間性とはむしろ、空間性へ向かう運動について精神が作り上げるその「終端の図式表象 *schéma*」(667) でしかないのであって、相互外在的な諸要素として完全な空間性の下に捉えられた物質の姿は、この図式表象でもってからめ取られた姿にほかならないのである。物質は、単に、完全な空間性へと至る運動の途上に、その運動の終端の手前に存在するのである。

さらにまた、この空間性へ至る運動は、持続に対して、それ自身積極的な意味を持った対立項として相対しているのではない。それは持続の弛緩したもの、緩慢な持続という意味を持つにすぎない。「それ自身としてすばらしいもの、驚きを引き起こすに値するものは、実在的なものの不可分の全体が前進しつつ成し遂げる絶えず更新される創造である」(679)。この積極的な運動が「中断interruption」し、「反転inversion」するや否や、空間性が自動的に現れる。「唯一の仮説だけが是認される。数学的秩序は何ら積極的なものを持たず、或る中断が自ずからそこに向かう形式である。物質性とはまさにこの種の中断である」(681)。したがって、精神と物質は対称的な形で二元性を成しているのではなく、物質は精神の運動の「反転」という意味を

持つにすぎない。したがって、そこにはもはや結び付くべき二項は存在しないと言える。物質と精神が互いに相手の対立項を成す二元論は、物質を空間と同一視するところに成立するのである。

では、どのようにして精神ないし創造の運動は「中断」し、「反転」するのだろうか？もちろん、物質を精神の絶対的外部として規定する見方はすでに却下されているのだから、物質は精神に対する一種の実在的抵抗として存在するのではない。この抵抗が精神に働きかけることによって空間性という正反対の傾向が生じるのではない。もしそうなら、空間性という傾向以前に、それを生じさせる、精神と予め実在的対立を成す何らかの存在を仮定することになるだろう。そうではなくて、精神の運動の「中断」そのものによって生じる逆方向の運動が物質なのである。だとすれば、この「中断」は、精神の運動が自分自身で自らを「中断」させることによって生じると考えなければならない。そうでなければ、依然として物質は精神の対立項にとどまるだろう。

「それ自身としてすばらしいもの、驚きを引き起こすに値するものは、実在的なものの不可分の全体が前進しつつ成し遂げる絶えず更新される創造である。なぜなら、数学的秩序そのものの複雑さが、それをいかに巧みなものであると仮定しても、世界に一欠片の新しさももたらさないのに対して、この創造する力がひとたび措定されると、（中略）それは自分自身から自ら気を逸らすse distraire d'elle-mêmeだけで弛緩し、弛緩するだけで拡がるのであり、拡がるだけで、然々に区別された諸要素の配置を取りしきる数学的秩序とそれらを結び付ける堅牢な決定論とが創造的行為の中断を表すことになるからである。さらに言えば、それらはこの中断それ自身と一体を成しているに他ならない」（679-680）。つまり、物質は精神の運動が自分自身から注意を逸らすことによって生じるのであり、こう言ってよければ、物質は或る意味で精神の消極的所産なのである。しかし、もちろんそこには単なる一元論が存在するのではなく、物質と精神は、その運動の方向を異にする限りにおいて、或る種の二元性を構成することになるのであり[8]、さらに言えば、こうした一元論か二元論かという既成の二者択一の構図を取り払った地点にベルクソンの理論は位置づけられるべきであろう。

結論

ベルクソンは、精神と物質の二元論のはらむ困難が物質を空間と同一視する見方に起因すると考え、精神と物質の実在論的対立図式を持続概念を導入することによって破壊する。『物質と記憶』では、イマージュという概念を提示することによって観念論的、実在論的な物質概念を退けつつ、さらにイマージュ

がイマージュとして私たちの経験に与えられるその屈折点において物質を捉えようとする。「イマージュの総体」とはそのようにして捉えられた物質を示しており、イマージュをつなぎ合わせて事後的に得られる全体のことではない。『創造的進化』の物質概念は、完全な空間性とは一致しないこうした物質の本性を、宇宙論的な視野の下でさらに掘り下げたものと言えるだろう。しかし、最後に付言すると、私たちには、持続概念そのものに取り組みつつベルクソンの二元論を今度は精神の側から記述する作業が残されている。

注

ベルクソンの著作からの引用および参照は、生誕百年記念版著作集（*Oeuvres*, puf, 1991.）の頁数を本文中に挿入することで示す。

（1）ユードによれば、ベルクソンは、一八九二年から翌年にかけて、アンリ四世リセにおいて三つの形而上学講義（空間、時間、物質）を行った。本論で参照するのはこの物質についての講義である（Bergson, H., *Cours II*, puf, 1992., p.417）。

（2）Bergson, H., *op. cit.*, p.421

（3）Bergson, H., *op. cit.*, p.422

（4）ベルクソンにおける身体が主体か否かという問題は本論にとっても重要な論点であるが、紙面の都合上省略する。サルトルとメルロ＝ポンティの見解は否定的である（Sartre, J-P., *L'imagination*, puf, 1994., p.45, Merleau-Ponty, M., *L'union de l'âme et du corps chez Maleblanche, Biran et Bergson*, Vrin, 1978., p.87）。

（5）Bergson, H., *Mélanges*, puf, 1972., p.806

（6）Bergson, H., *op. cit.*, p.808

（7）Bergson, H., *op. cit.*, p.809

（8）ジャンケレヴィッチはベルクソニスムを実体の一元論であり傾向の二元論であると指摘している（Jankélévitch, V., *Henri Bergson*, puf, 1989., p.174）。

（たやすこうじ　大学院博士後期課程・哲学哲学史）